

ISSN 0910-9293

宮城県保健環境センター年報

平成11年度

ANNUAL REPORT
OF
MIYAGI PREFECTURAL INSTITUTE OF PUBLIC HEALTH AND ENVIRONMENT

No.18 2000

宮城県保健環境センター

は じ め に

この度、平成11年度における宮城県保健環境センターの業績を取りまとめ、年報として発刊する運びになりましたので、ご高覧の上ご意見を賜れば幸いと存じます。

さて、近年、私達をとりまく環境については、地球温暖化、オゾン層の破壊や酸性雨等の地球的規模の環境対策、自動車排ガス対策及びダイオキシン類・環境ホルモンなどの微量化学物質による生態系への影響等、早急に改善をしていかなければならない問題が数多く残っております。

また、食品の安全性の確保の観点からは、残留農薬、食品添加物、動物用医薬品等への対応に加え、環境ホルモンや遺伝子組み換え食品等への検査体制の確立が求められております。

さらに、感染症新法の成立に伴い当センターが基幹感染症情報センターと位置づけられ、県内全域の新興・再興感染症を含めた患者発生情報の迅速な収集・解析・提供及び病原体の検査体制の更なる充実が求められており、また、遺伝子検査設備を活用したSRSSV等の迅速測定法の導入や環境ホルモンに関わる検査法の確立等が求められています。

一方、廃棄物問題では、今年度、循環型社会形成基本法、食品リサイクル法、資源有効利用促進法等のリサイクル・循環関連法案が成立し、大量生産・消費・廃棄という一方通行型の社会から循環型社会の制度的な枠組みが整い、益々この分野での対応も必要となってくると考えられます。

このように、近年、人の健康の保護、生活環境の保全等に関わる法律、指針の制定により各種施策の設定、役割の位置付けがなされ、将来的に取り組まなければならない事業が多くなる一方、各種基準等が毎年設定されることにより業務量の増加につながっています。特に、化学物質については、分析項目の多様化、微量化が進んでおり、長期的観点に立った高度な分析機器の計画的整備と高度な専門知識と技術を有する人材の確保、育成することが、益々重要になってくると考えております。

今年度は、地方機関の機構改革の一環として、保健所で実施されていた試験検査機能を当センターに集約し、集中的、効率的に検査業務を実施しております。しかし、今年夏に発生したハムや加工乳の食中毒事件に関連して、「迅速」と「正確」を確保する観点から、緊急に検査環境や決済の流れ等GLPの再確認を行うなど、職員一同気を引き締めて検査に取り組んでいるところです。今後とも本庁、保健所と情報交換を密にしながら的確に対応してまいりたいと考えております。

最後になりましたが、今後とも保健環境行政の推進に貢献してまいりたいと考えておりますので、皆様のなお一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成12年12月

宮城県保健環境センター

所 長 森 泰 明

目 次

A 事業概要

I 総 説

1 沿 革	1
2 機構及び業務分担	1
3 職 員	2
4 予算及び決算	3
5 主要機械器具	3
6 技 術 研 修	6
7 講師等派遣	7
8 学術情報の収集	8

II 概 況

1 情報管理部	9
2 微生物部	12
3 理化学部	19
4 環境衛生部	21
5 大気部	23
6 水質部	28

B 調査研究

I 論 文

わが国における食中毒損害賠償金額からみた原因物質（細菌及びSRSV）別の 食中毒症状の推定	34
阿部 和男 白取 博志 宇野 和生 渡辺 丈夫	
環境情報システムとしての地理情報システムの有用性	39
高橋 正人 渡辺 丈夫	
A型インフルエンザ迅速診断法の検討	42
後藤 郁男 沖村 容子 秋山 和夫 野呂 知世 白石 廣行 堺 春美	
宮城県における19才以下女子の風疹抗体保有状況	45
沖村 容子 野池 道子 後藤 郁男 秋山 和夫 白石 廣行	
過去4年間におけるかき及び環境水中のSRSV検出状況	49
秋山 和夫 野池 道子 佐々木 美江 山口 友美 有田 富和 後藤 郁男 佐藤 千鶴子 畠山 敬 沖村 容子 斎藤 紀行 白石 廣行	

宮城県における腸炎ビブリオ調査	56
嶋山 敬 山口 友美 斎藤 紀行 秋山 和夫 白石 廣行 小笠原 久夫	
パルスフィールドゲル電気泳動法によるSTECの分子疫学	61
山口 友美 有田 富和 嶋山 敬 斎藤 紀行 秋山 和夫 白石 廣行	
20年間（1980年～1999年）のシジミ中のCNP残留濃度の経年変化と水田用初中期除草剤 によるシジミへの汚染	65
氏家 愛子 新目 眞弓 菊地 秀夫 大江 浩	
農産物中残留農薬の多成分一斉分析法の検討	70
菊地 秀夫 氏家 愛子 新目 眞弓 大江 浩	
ポリカーボネート製品中ビスフェノールAの材質試験及び溶出試験（第2報）	75
高橋 紀世子 石川 潔 細矢 義隆 大江 浩	
宮城県産カドミウム汚染米の分析について	79
新目 眞弓 菊地 秀夫 氏家 愛子 大江 浩	
ハイテク素材廃棄物からの有害物質の溶出等に関する研究	83
加藤 謙一 佐々木 ひとえ 浦山 清 葛岡 勝悦 阿部 時男 嵯峨 京時 高橋 美保 助野 典義	
室内環境中における揮発性化学物質に関する研究（第2報）	88
阿部 時男 佐々木 ひとえ 浦山 清 加藤 謙一 葛岡 勝悦 嵯峨 京時	
古紙再生素材の環境負荷について	90
阿部 時男 佐々木 ひとえ 浦山 清 加藤 謙一 葛岡 勝悦 嵯峨 京時	
宮城県における光化学オキシダントの特徴（1999年度）	95
野村 保 中村 栄一 仁平 明 佐藤 信俊 沢田 和夫 鈴木 康民	
全県一斉酸性雨調査結果について	101
佐久間 隆 木戸 一博 小野 研一 中村 栄一 野村 保 仁平 明 沢田 和夫	
嗅覚測定法による評価に関する検討	107
菊地 英男 新垣 康秀 須藤 幸藏	
伊豆沼・内沼における「巻き上がり現象」を利用した底質除去試験	113
渡部 正弘 小葉松 英行 水谷 登志喜 八木 純 柴崎 徹	
宮城県の湖沼（第3報）—魚取沼—	117
清野 茂 水谷 登志喜 三沢 松子 中村 朋之 金野 由之 安藤 伸一 栗野 健 遠藤 哲男 八木 純	

尿素融雪剤が原因と推定された魚への死事故事例	124
渡部 正弘 齋藤 紀行 吾妻 正道 阿部 公恵 牧 滋 小葉松 英行 八木 純	
荒雄川の水環境	127
清野 茂 三沢 松子 水谷 登志喜 吾妻 正道 八木 純	
船形連峰における山地渓流水の水質特性	134
清野 茂 三沢 松子 水谷 登志喜 吾妻 正道 阿部 公恵 八木 純	
II 資 料	
宮城県における新生児マス・スクリーニング	143
佐藤 由紀 佐々木 美江 氏家 恭子 泉澤 淳子 白石 廣行	
宮城県における6か月児神経芽細胞腫マス・スクリーニング	145
泉澤 淳子 佐々木 美江 氏家 恭子 佐藤 由紀 白石 廣行	
宮城県における1歳6か月児神経芽細胞腫マス・スクリーニング	147
氏家 恭子 佐々木 美江 泉澤 淳子 佐藤 由紀 白石 廣行	
鮮魚中の一酸化炭素の濃度	149
氏家 愛子 新目 眞弓 菊地 秀夫 大江 浩	
乳幼児用繊維製品からのホルムアルデヒド検出例について	151
石川 潔 高橋 紀世子 細矢 義隆 大江 浩	
平成11年度における理化学検査結果	153
理化学部	
平成11年度水道水源中のクリプトスポリジウム検査結果	156
葛岡 勝悦 佐々木 ひとえ 浦山 清 加藤 謙一 阿部 時男 嵯峨 京時	
ダイオキシン分析施設の概要	158
鈴木 滋	
自動車交通騒音の測定手法に関する基礎的調査	160
高橋 誠幸 菊地 英男 新垣 康秀 百川 滉 沢田 和夫	
宮城県内公共用水域における内分泌攪乱化学物質（有機スズ化合物）実態調査	
一水生生物（主に貝類）に対する影響	164
水谷 登志喜 吾妻 正道 佐久間 隆 八木 純	
花山湖のアオコ調査結果の概要について	166
吾妻 正道 渡部 正弘 水谷 登志喜 牧 滋 小葉松 英行 八木 純	
III 調査研究課題一覧	168

C 研究発表状況

I 他誌論文抄録	169
II 学会発表等	172
III 研究発表会	174